
喉仏

昼寝日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

喉仏

【NZコード】

N1401V

【作者名】

昼寝日和

【あらすじ】

私と友人と友人の彼氏のはなし。

グラスにびつしりとついた水を指ですくい、平らな喉にくるくると撫で付ける。お酒で火照った身体に、それはひんやりと気持ちよかつた。満足した私はそのまま指を下へすべらせて小粒のネックレスをいじる。正直、ちょっと退屈していた。

正面の席には友人の恋人、その隣には友人が座っていて、さつきから一人はすごく楽しそうにしゃべっている。いや、実際すごく楽しいのだろう。退屈している私になど見向きもしない。

田の前の男のひょっこりつきた喉仏をぼんやりと眺めながら、やつぱり断ればよかつたなあ、なんて考える。相談したいことがあるのと友人に思い詰めた声で呼び出され、身構えて来てみたらこれだ。そこでばつたり彼氏と会つちゃって。相談はまた今度でいいからさ、せつかくだしみんなで飲もうよ。なんて無邪気に言われてしまつては呆れるしかない。

さすがに友人と友人の彼氏と私の三人で一緒に、というのはかなり気まずいので断つたのに、どうゆうつもりなのか友人はしつこく食い下がる。結局、断り切れずに今にいたるわけだ。

見るともなしに見ていた横向きの喉仏がこちらを向いた。ちらりと、友人の彼氏と田が合う。退屈している私を気にしたのかと思つたけれど、どうもそうではないようだ。友人の彼氏は友人との会話の合間に何度も何度も意味深な視線を向けてくる。

友人の方はどうと、そんな彼氏の様子には反応せず、ろれつの回らない舌で意味不明な言葉を次々に吐き出していた。時折のぞく奥歯の金の詰め物。

そうとう酔つていいみたいだけど、決して酒に弱くない友人がここまで状態になるには、まだはやすぎるよつな気がする……。

何度目かはわからないけれど、また友人の彼氏と田が合つた。二

ヤリと、不快な笑みを向けられる。どう反応すればいいのかわからず、グラスの側面を撫でてみた。

ふと気が付くとなぜか友人も私のことを見ている。しかもその目は酔っぱらいの目ではなく、どこまでも冷静で、何の感情もこもらない、じつと観察するような目つきだった。

一種類の視線にさらされて、私はすっかりほろ酔い気分が冷めてしまう。

あわててうつむき、とけた氷で薄まつたお酒に口をつけた。それから恐る恐る顔を上げると、二人は何事もなかつたかのように樂しげに会話をしている。

私は再び目の前の喉仏に目を向ける。どうして男の人には喉仏なんもあるのだろうか。あのでっぱりの中には一体何が入っているのだろう……。

つらつらと考えていたら、友人の彼氏の不快な笑みも、友人の觀察する目も、全部私の思い違いで、単に二人の仲が良いのを見せつけられているだけなんだという結論に達した。いつのまに喉仏から頭が離れてしまったのかはわからないけれど、とりあえずそう結論付いたのだから、まつたくもって思い悩むことはない、と自分に言い聞かせる。

店を出るころには、友人はぐでんぐでんになつていて、友人の彼氏の支えなしでは歩けなくなつていた。二人はもつれ合つよう歩き、とても自然に人気のない公園へ入つていく。私は一人に一声掛け、さつさと帰ろうとした。なのに酔っぱらいの友人は、ついてこいとわめいてきかない。ちらりと見える奥歯の金の詰め物。友人の彼氏がなぜかニヤニヤと笑つている。

園内のベンチに友人が寝かされた。私はなにをするでもなく、その様子をぼんやりと眺める。

友人の彼氏は水でも買いにいこうかと言う。では私は彼女とここで待つてます、と返答した。なのに、いいからいいからと手首を捕

まれ引っ張られる。なにがどういいのかわからない私は、あの酔っぱらいを一人にするわけにはいかないと抗議してみたけれど、無視された。

友人はベンチに横たわったまま、離れていく私と友人の彼氏をじつと見ている。やっぱり、あれは酔っぱらいの目ではない、と思った。

ベンチからそう遠くないけれど、薄暗く、またベンチからは死角になつている所まで引っ張られる。コンビニは公園の外だし、こっちの方に自動販売機があるわけでもなかつた。

友人の彼氏はなぜか、私のことを凝視していく。目が潤んでいるのはたぶんアルコールせいだと思いたい。

どうしていいのかわからず、私も友人の彼氏の喉仏を凝視してみる。一体、この部分には何が入つているのだろうか……。

いきなり友人の彼氏が乱暴に肩をつかんできたので、それでは私も、と目の前にある喉仏に爪をくいこませてみた。存外簡単にくいこんでしまい、拍子抜けだ。そのままがぱりと開いてみると、中にぐにやりと赤いモノが入っている。どきどきしながらつまみ出したそれは、小さい蛸だつた。

ふいに友人の彼氏が、どさりと倒れてしまつ。なにかまずいことでもしただらうかと、私は少しあせつた。

手の中にはうねうねと動く小さい蛸。これを元通りに男の喉仏へ戻せば起き上がるのだろうか。でも、起き上がつてしまふとそれはそれで困るような……。

呆然としている私から、友人は蛸を取り上げる。いつの間に隣にいたんだろう。倒れた彼氏には田もくれず蠢く蛸を口に放り込んだ。そして、友人は蛸をぷちぷちと音を立てて咀嚼する。

「まずい」

思い切り顔をしかめ、倒れている彼氏に向かつてぐしゃぐしゃの赤い残骸を吐き出す友人。酔っ払つている様子はなかつた。

まだ飲み足りない、奢るからつきあってよ、と屈託なく言われて、特に断る理由もない私は首を縦に振る。それから相談したいこととは何だったのかと尋ねると、もう大丈夫、解決したからと返事がくる。垣間見た奥歯の詰め物は、蛸のすみのせいか真っ黒になっていた。

私も友人も、足下に転がっているものについては触れず、そろつて公園を後にする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1401v/>

喉仏

2011年7月24日03時22分発行